

報告

専門日本語教育の内容と方法に対する 日本語教師と専門教師の認識差

- マレーシアの理系予備教育の担当者へのアンケート -

前田佳奈*

日本の大学に編入学するために行われている海外の理系予備教育機関における日本語教育について、日本語教師と専門科目担当教師にアンケート調査を行った。調査項目は、大学の専門科目に対応するための日本語教育について1) その必要性和内容、2) その方法、3) 参画することへの関心の3点である。その結果、以下のことが明らかになった。①専門日本語教育の必要性は、日本語教師も専門科目担当教師も認識しており、その実施については積極的である。②両者とも自分が専門日本語教育を実施すべき主体であるという意識が低い。③専門領域での活動内容や、それを支える技能についての理解が両者で異なっている。日本語教師は、言語技能向上に関心が集中しているが、専門科目担当教師は、授業に参画する上で必要になる技能に関してより具体的なイメージを持っている。④専門日本語教育の活動内容・方法に関して両者とも具体的なイメージを持たない。この状況を打開するためには、教師が事前に、専門日本語教育に関する知識や技術を身につけておく必要がある。

キーワード：専門日本語教育、マレーシア、理工系予備教育、アンケート

1. はじめに

本報告は、海外における学部留学生のための理工系予備教育機関である日本・マレーシア高等教育大学連合プログラム（Japanese Associate Degree Program 以下「JAD」）における日本語教育のよりよい方法についての示唆を得るために、教育を担当する日本語教師と理工系専門科目担当教師（以下「専門教師」）に対してアンケート調査を行なった結果を報告し、それに基づいて海外での予備教育における専門日本語教育のあり方について考察するものである。

JADとは、政府によって選抜されたマレー系マレーシア人を対象に、マレーシア国内で3年間の日本語および理工系科目の教育を行い、日本の大学の学部3年次に編入させるツインニング・プログラムである。JADでは、拓殖大学が日本語教育の、芝浦工業大学が理工系専門科目の基幹校となっており、日本語教育の専門家及び理工系専門科目教員が派遣されている。教師は、日本語教師15名（日本語母語話者14名、非母語話者1名）、専門教

師9名（日本語母語話者6名、非母語話者3名）で構成されている（2007年3月現在）マレーシアにおける3年間をディプロマコースと位置づけ、日本語教育を中心とした予備教育と日本の大学のカリキュラムに基づく工学系大学教育を行っている。1年目は主に日本語教育を中心とした授業が行われる。専門教育は、1年次の前期は英語で行われるが、後期から徐々に日本語による教育に切り換えられる。このため、この時点から学術活動に対応するための日本語の必要性が増す。筆者は、2005年5月から2007年3月までJADでの日本語教育に携わった。

マレーシアでの予備教育の目的は、日本の大学での専門教育への参加が円滑に行われるように準備することにある。理系の場合、専門教育に用いられる言語には、日常言語の知識で対処できない語彙や表現が多く含まれているため、文系よりも専門日本語教育の必要性が高い。3年間で大学教育を受けるために十分な日本語を海外において獲得しつつ、一方で日本人学生が2年間に学ぶ専門の内容をも身に着けることは容易に

*九州国際大学別科日本語非常勤講師

達成できるものではない。そのため教育担当者が共通の目的認識を持ち、有機的に連携して教育を行う必要がある。しかし、JADの教育を担当する日本語教師と専門教師の教育目的及びその内容についての理解は、必ずしも一致していないように思われる。

そこで本稿では、特に大学の専門科目に対応するための日本語教育の必要性・内容・教授方法について両者がどのような理解を持っているかをアンケート調査によって明らかにし、その結果について考察する。

2. 海外での予備教育に関する研究

マレーシアにおける予備教育の研究については、小川 (1995)¹⁾、来嶋 (1997)²⁾、武井 (2006)³⁾ があるが、現状や目標などを概観し、報告するにとどまる。西谷 (1995)⁴⁾ は、中国での予備教育における日本語教師と専門教師の連携について言及し、情報の共有化や相互の授業見学を通して両者の連携改善を行ったことを報告し、Mailing List の活用による、派遣経験者との情報交換と情報の蓄積などの提言を行っている。しかし、JAD には派遣以前に教育経験がほとんどない若い教師も少なくなく、西谷の提言を実行する体制が整っていないように思われる。本稿では、そのような教員団の中で専門日本語教育の実施に向けて何をすべきか、何ができるかという観点から考察したい。

3. 調査の方法

調査は2007年2月中旬に行い、JADプログラムに所属する教師24名（内、日本人教師20名、マレー人教師4名）を対象とした。日本人教師18名、マレー人教師1名から回答を得た（回収率75.0%）。アンケートは、専門日本語教育について基本的に肯定的な認識を持っているか、どの程度具体的な理解や見通しを持っているかを調べるために質問項目を作成した。アンケートの回答から明らかにしたいのは、以下の3点である。アンケートの具体的な質問内容は、付録に示した。

() に該当する番号を示す。

(1) 大学の専門科目に対応するための日本語教育をJADで行なう必要性の有無、およびその内容についての認識。具体的には、a. 専門日本語教育の必要性 (2・3)、

b. 専門日本語教育に対する現状認識、およびその内容 (4・5・6・7・8・9)、c. 行うべき専門日本語教育の内容とその判断の根拠 (10-①・10-②)、d. およびその内容に必要な技能の認識 (10-③・10-⑤・13・14・15)

(2) 大学の専門科目に対応するための日本語教育の方法に関する認識。具体的には、a. 授業形態 (10-④)、b. カリキュラム上の位置づけ (10-⑥・10-⑦・10-⑧・10-⑨)

(3) 大学の専門科目に対応するための日本語教育の実施に積極的に参画することへの関心 (10-⑨・12・16)

4. 結果と考察

4.1 アンケートの回収率

アンケート回収率を表1に示した。現地人の専門教師からはほとんど回収できなかった。これは、日本人教師と現地人教師の交流の少なさの端的な表れであるように思われる。

4.2 必要性の有無・内容についての意識

(1) -a 専門日本語教育の必要性

専門科目に対応するための日本語教育の必要性については日本語教師も専門教師も回答者全員が「必要だ」と回答している。

(1) -b 専門日本語教育に対する認識、および内容

現行のJADプログラムの中に専門科目に対応するための日本語教育が含まれているかどうかの現状認識は、日本語教師と専門教師では異なる。日本語教師は全員が「含まれている」と認識している。その根拠として語彙教材、読解教材を挙げ、理系の語彙が含まれている、トピックが理系のものであるという2点を指摘している。これは、日本語教師の考える専門日本語の内容が、主に語彙のレベルに集中していることを示している。一方、専門教師の回答を

表1 回収率 () 内は現地人教師

	対象者数	回収数	回収率
日本語教師	14(1)	12(1)	85.7%
専門教師	9(3)	6(0)	66.7%
合計	23(4)	18(1)	75.0%

見ると、半分が「含まれていない」と答えている。

どんな内容を扱えばいいかという質問への自由回答では、「理工系の専門書特有の表現、言い回し」、「専門用語ではなく、難しい日本語の表現」という回答が見られた。表現が十分明確ではないものの、専門教師は語彙ではなく、さらに大きな単位の表現や、専門の内容と連動した日本語を教育内容として漠然と想定していることが窺われた。

(1) - c 行うべき専門日本語教育の内容とその判断の根拠

JAD の教育内容を充実させるためには、専門日本語教育でどんな活動を行うべきかについて尋ねた。結果を図1に示す。この質問に対して、両者とも一致して必要であると判断しているのは、「レポートや論文を書く」、「レポートや論文を読む」、「レポートや論文のための情報収集」という言語技能中心の活動である。これらの活動は、言語技能中心で語学活動の延長線上にあり、文系出身者が殆どを占める日本語教師にも想像しやすい活動であることが窺える。

日本語教師の認識が低く、専門教師の認識が高い活動には、「実験や実習に参加する」「期末試験に解答する」がある。これらの活動は、より理系的で実際的な活動であり、文系出身者にはあまり馴染みがない。文系とは違い、理系は期末試験の点数ではっきりと成績が決まる。専門教師は自らの体験から、「期末試験に解答する」という活動を重要視しているのに対して、日

本語教師は、これらの活動を自らの体験から想像することが難しいため、重要だという実感が薄いのではないだろうか。

両者とも個人によって認識が分かれている活動内容に、「講義を聴く」「ゼミに参加する」がある。大学入学後の必要性を考え、行うべきだと考えるか、講義やゼミの特徴から日本語教育には向かないと考えるか、すなわち、必要性和実行可能性のどちらを重視するかによって判断が分かれたと考えられる。

「行うべき専門日本語教育の内容」を選択してもらった後、何を根拠に必要と判断したかを尋ねた。両者に共通して「必要」と判断する根拠となったのは、「大学での必要度が高い」「独学が難しい」であった。一方、「必要」と判断しない項目がある場合に、それを「必要」としない根拠を尋ねたところ、日本語教師は「カリキュラムに組み込むことが難しい」

「適切な教材をみつけにくい」を挙げている。日本語教師は、必要性よりもまず、授業で行えるかどうか意識が向く様子が窺える。その他、日本語教師の自由回答として「JAD ですすでに取り組んでいる」「試験解答の技能は作文で対応している」「日本の大学で学ぶことができる」という回答もあった。日本語教師は、専門日本語教育について楽観的に考えていることが窺える。

(1) - d 専門日本語教育に必要な技能

学生に必要な技能についての認識は、日本語教師と専門教師で大きく異なる。日本語教師は、語彙、読解、聴解、会話、文章構成など、言語技能を挙げているのに対し、専門教師は、語学力、忍耐力、論理的思考力、計画立案・実施力、教員に質問する力、マネジメント能力などを挙げ、より大きな枠組みで必要技能を捕らえている。さらに、必要な技能について、JAD 学生と JAD 学生を受け入れた日本の大学の専門の指導教員がどのように考えているか推測してもらった。これについても日本語教師は、自らが想像しやすい論文・レポートの書き方、読解力、聴解力、語彙、文法、漢字などの言語技能の必要性を挙げているのに対し、専門教師は、忍耐力、論理的思考力、データをもとに現象の原因を推測する力、議論できる力、分析し問題解決のために協力できる

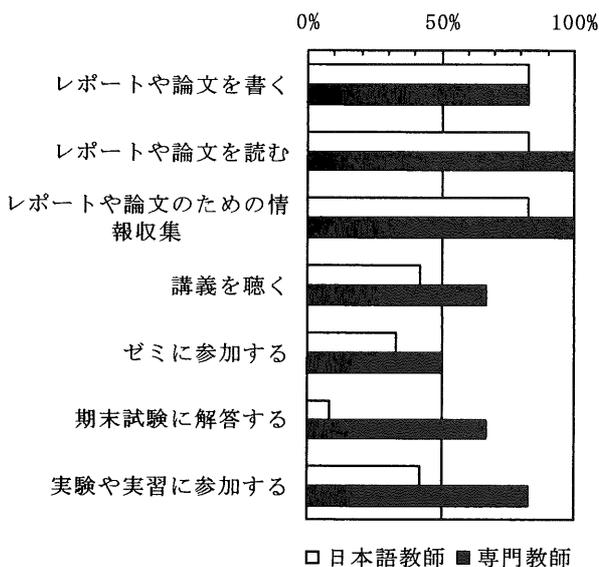


図1 行うべき専門日本語教育の内容

言語力などを挙げ、より大きな枠組みで必要技能を推測している。日本語教師は、言語の訓練に関心が集中し、専門の学術活動に参加するために何が必要かを十分に具体化して捉えていないようである。

4.3 具体的な方法に関する認識

(2) -a 授業形態

専門日本語教育ではどのような授業形態が必要か、自由回答の形で尋ねた。これについても両者の認識は異なる。日本語教師は「スピーチ」、「レポートを書く」、「精読・速読」、「ディベート」など言語技能中心で行われる授業形態を挙げている。一方、専門教師は「グループワーク」、「あらゆる授業」などを挙げているが、中には無回答もあった。

この回答の中で、特に専門教師のみが「グループワーク」を授業形態として挙げていることが注目される。実験や実習を行う上で、グループ活動が欠かせないという理工系の実情を踏まえた上での回答だと考えられる。両者に共通しているのは、日本語教師も専門教師も、捉え方が大まかで、必要な技能を養うための授業形態について、具体的なイメージを持っていないことである。

(2) -b カリキュラム上の位置づけ

カリキュラムへの対応についても両者の認識は異なる。「専門日本語教育をどの時間に行うか」という質問に対して、日本語教師の約半数が「日本語の授業の一部を専門日本語の授業にあてる」と答えているが、専門教師は「日本語・専門科目の授業両方をあてる」と答えている。しかし、専門教師の半数以上が「分からない」と回答し、日本語教師の中でも意見が分かれていることから、両者とも共通の具体的なイメージは持っていないようである。「カリキュラムへの組み込み方」について尋ねたところ、「両者が連携する」「到達目標を示す」などという回答があったが、圧倒的多数を占めたのは「分からない」または無回答で、開始時期、授業時間数にふれたものはなかった。この結果から、両者ともカリキュラムについての認識がなく、具体的なイメージも持っていないことが窺える。

「専門日本語教育を誰が担当するか」という問に対しては、「日本語教師と専門教師が協力する」という答えが圧倒的多数を占める。協力が必要だというのは

妥当な認識であろうが、このことは一面、自分が専門日本語教育実施の主体であるという意識がどちらにも欠けていることを示しているように思われる。

4.4 参画への意欲

(3)の専門日本語教育の実施への参画には、両者とも積極的な姿勢を見せている。専門日本語の教え方の研修があれば受けたいと全員が回答した。

4.5 まとめ

以上、専門日本語教育に関する日本語教師と専門教師の認識について述べた。これらをまとめると以下ようになる。

- ①専門日本語の教育の必要性は、日本語教師も専門教師も認識している。また、その実施について基本的には積極的な姿勢を持っている。
- ②日本語教師も専門教師も専門日本語教育に対して自分が積極的に関わるものだという意識が低い。
- ③専門領域での活動内容やそれを支える技能についての認識は、両者で異なる。文系出身者が多い日本語教師は、自らが経験したことのない理工系の授業活動を想像できず、理工系の科目に対応するのに必要な技能を具体的に把握していない恐れがある。
- ④専門日本語教育をどう行なうか、活動内容・方法に関して両者とも具体的なイメージを持たない。両者とも関心と意欲はあるものの、具体的な方法についての情報を持たず、日本語教師は「大学に入れば何とかなるだろう」と考え、専門教師はいささかの危惧を抱きつつも具体的な提案はしていない。

このように、専門日本語教育の教育が進まない背景には、両者の間の見解に相違があるのではなく、教育として進めるだけの知識を持っている教師が得がたいという事情があることが明らかになった。専門教師は大学の授業に参画する上で必要な技能に関してより具体的なイメージを持っているのであるが、それを教材や授業に反映させるための十分な知識や経験を持っている者はいない。

現時点では、教師たちに専門日本語教育を進める基礎となる情報・知識が不足している上、教育の質的向上を図るために協働する体制がなく、それを指導できる専門家もいないため、漠然とした意欲はあっても、それが具体的な努力に結びついていない。

5. おわりに

今回の調査の結果にもとづいて、海外の予備教育機関で専門日本語教育を行うために次のことを提案する。まず、すぐにでも始められることとして、

(1) コース改善のための組織を作って活動すること。日常業務のための運営会議などとは別に、コース改善のために教師が協働する場を設け、それへの参加を職務の一つと位置付ける。

(2) 上の組織で行う活動の目標を具体的に立てること。例えば、「専門課程でのニーズ調査」「専門日本語教育のシラバス開発」などの年度目標を立てることができよう。その目標に向けて、各教師の責任を明確にし、活動内容を企画する。

上の二つによって、現地人教師と日本人教師、また、日本語教師と専門教師、短期間勤務する教師と継続的に関わる教師など、立場の違う教師たちが交流と協働を行うことが可能になると考える。しかし、大幅な改善のためには、これだけでは不十分であり、抜本的な対策が必要だと思われる。

(3) プログラム全体で必要性を認識すること。派遣された教師が現地に行って初めて問題に気づくということでは、現地の専門日本語教育はなかなか進まない。プログラムとして、指導できる専門家を派遣するか、派遣される教師が事前に問題を認識し、内容や方法に関する知識を深めておくことが重要だろう。

筆者自身は、JADに勤務していた間、専門日本語教育の必要性を漠然と認識してはいたが、日々の業務に

追われ具体的な一歩を踏み出すことができなかった。少なくとも日々の授業の中で行ったことや、行うべきだったと感じたり知りたいたり考えたりしたことの記録を取り、教師間で共有するという程度の努力はできたはずであった。JADに派遣された教師は、2,3年程度で交代することが多く、各自の経験や観察が蓄積されていきにくい。コース改善を教師の業務の一つとして位置づけ、各自の努力が継続的に受け継がれるようにすることが必要である。

今回は教師を対象として調査したが、今後は、JADの留学生、JADの留学生を受け入れた専門科目の指導教員の観察や大学の専門科目に対応する日本語についても調査を行い、海外における専門日本語教育の方法改善のために情報提供を行っていきたい。

謝辞 今回の調査に快く協力してくださったJADの皆様には心から感謝いたします。

参考文献

- 1) 小川誠: マラヤ大学予備教育課程における日本語教育, 日本語教育, 85号, pp.151-159 (1995)
- 2) 来嶋洋美: マラヤ大学予備教育課程, 日本語教育通信, 23号, pp3-6 (1997)
- 3) 武井康江: マレーシア・マラヤ大学予備教育部日本留学特別コースについて, 麗澤大学紀要, 第82巻, pp313-318 (2006)
- 4) 西谷まり: 日本語教員と専門科目教員の協力体制 - 東北師範大学赴日本国留学生予備学校の事例から -, 専門日本語教育研究, 第3号, pp35-40 (2001)

Japanese Language and Science Teachers' of Perceptions of Instruction in Technical Japanese in an Overseas Preparatory Program for Science Majors

MAEDA, Kana

Preparatory Course for Undergraduate Students, Kyushu International University

A questionnaire survey was given to teachers at a Japanese Associate Degree Program in Malaysia to assess their perceptions about instruction in technical Japanese. Consequently the following results were found 1) Both the teachers of Japanese (JT) and the teachers of science (ST) admit the need to teach technical Japanese. 2) However, neither of these groups of teachers is willing to take a leading role in the instruction of technical Japanese. 3) The STs have a more specific image of the activities in which the students are to be engaged in the future, but this knowledge is not shared by the JTs. 4) Neither of them have any clear ideas about the specific contents or methods of instruction most appropriate for teaching technical Japanese. In order to promote instruction in technical Japanese, it is necessary to equip these teachers with the knowledge and skills most needed for such instruction before they begin teaching at JAD.

keywords: *instruction in technical Japanese, Malaysia, preparatory program for science majors, questionnaire*

「付録」 アンケートの質問項目

1. JAD プログラムの目標は、何だと思えますか。
2. JAD では、理系専門科目への対応のための日本語の訓練を行うことが必要だと思えますか。() はい () いいえ
3. 2で「いいえ」と答えた方にお聞きします。
必要がないと思う理由は何ですか。(複数回答可)
- () 基礎の段階でするのは適切ではないから
() まずは、漢字・語彙・文法などの知識をつけることが大切だから
() 専門科目に対応する力は、本人の能力や努力によるものだから
() 専門科目に対応する力は、専門の授業の中で自然に得るものだから
() 日常的日本語として教えている文法や語彙や漢字の知識をつければ、専門科目に対応する力も補うことができるから
() その他 _____
4. JAD プログラムの中に専門科目への対応のための日本語教育が含まれていると思えますか。
- () はい <5へ進んでください>
() いいえ <8へ進んでください>
5. 4で「はい」と答えた方にお聞きします。「はい」と答えてくださったのは、下のどちらの意味ですか。
- ①そのための授業や教材があるから <6へ進んでください>
②特別に割り当てられた授業はないが、通常の授業の中で専門科目への対応が意識されているから <7へ進んで下さい>
6. 5で①と答えた方にお聞きします。例えばどういう授業・教材ですか。
7. 5で②と答えた方にお聞きします。例えば、どういう部分が専門教育への対応になるとお考えですか。また、そういう部分を扱う場合に、特に意識していらっしゃる場合がありますか。それは、どんなことですか。
8. 4で「いいえ」と答えた方にお聞きします。
専門科目への対応のための日本語教育では、例えばどんな内容を扱えばいいと思えますか。
9. 大学の授業参加ということを主眼として考えたとき、そのためにJADプログラムの中でもう少し手厚い対応をしておくことが必要だと考えますか。
- () はい <10へ> () いいえ <11へ>
10. 9で「はい」と答えた方にお聞きします。
①具体的にはどういう点ですか。(複数回答可)
- () 講義に参加する
() ゼミに参加する
() 期末試験に解答する
() レポートや論文を書く
() 実習や実験に参加する
() 教科書や論文などを読む
() レポートや論文のために資料を収集したり、それから情報を収集したりする
- () その他 _____
- ②その活動を選ぶ理由は何ですか。(複数回答可)
- () 独学が難しいと思うから
() 大学で最も必要度の高いものだから
() 適当な教材を見つけやすいと思うから
() 予備教育のプログラムに組み込むことが比較的容易だから
() 予備教育の段階で、効果が上がりやすいと期待できるから
() その他 _____
- ③その活動をするためには、どんな技能が必要だと思えますか。
④その技能を養成するには、どんな授業活動をしたらいいと思えますか。
⑤①で選ばなかった技能について、その技能を選ばない理由は何ですか。(複数回答可)
- () 大学で最も必要度の低いものだから
() 独学で得ることができると思うから
() 適当な教材を見つけにくいと思うから
() 予備教育のプログラムに組み込むことが難しいから
() 予備教育の段階で、効果が上がりにくいと予測できるから
() その他 _____
- ⑥特別な時間を取るとしたら、現行のカリキュラムにどのように組み込みますか。
- () 日本語の授業の一部をそれに当てる
() 専門科目の授業の一部をそれに当てる
() その他 _____
- ⑦カリキュラムの組み込み方について、何かお考えがありますか。
⑧特別な教材や教授法を開発することが必要だと思えますか。
- () 必要だ () 必要はない
- ⑨誰が担当すればいいと思えますか。
- () 日本語教師 () 専門科目の教師 () その他 _____
11. 9で「いいえ」と答えた方にお聞きします。
する必要がないとお考えになる理由は何ですか。(複数回答可)
- () 予備教育の担当する部分ではないから
() 今のままでも、専門の授業に対応できるから
() その他 _____
12. 専門につながる日本語の教え方について研修があったら、受けてみたいですか。
- () はい () いいえ
13. 現在の JAD 学生は、専門の授業でやっていくために必要な力は何だと考えていると思えますか。
14. 現在日本に留学している JAD 学生が、専門の授業のために、予備教育の間にもっと勉強しておきたかったと考えていることは何だと思えますか。
15. JAD 修了生を受け入れた専門の指導教官が、JAD 修了生に対してもっと必要だと感じていることは何だと思えますか。
16. 日本語の授業や教材についての希望や、やってみたいこと作ってみたいものがありましたら書いてください。